



国際会議報告 21世紀の課題と提言

— 第 26 回国際内科学会 —

黒川 清

日本内科学会

100 周年事業のハイライト

日本内科学会が設立されて平成 14 年に 100 周年を迎えた。100 年前の近代化に進みつつある日本の状況を考えてみると興味深い。日清戦争を経て日露戦争を迎えつつある頃である。多くの学会等の学術団体がこの頃に発足していることが理解される。この頃に多くの日本人が医学界で世界的な貢献をしていた。北里柴三郎、志賀潔等はこの頃までに世界的に大きな貢献をしていたし、橋本の甲状腺炎、高安の大動脈炎、田原・Aschoff の心臓結節の発見等はすべて 20 世紀はじめの 10 年のことであり、野口英世が渡米したのもこの頃である。

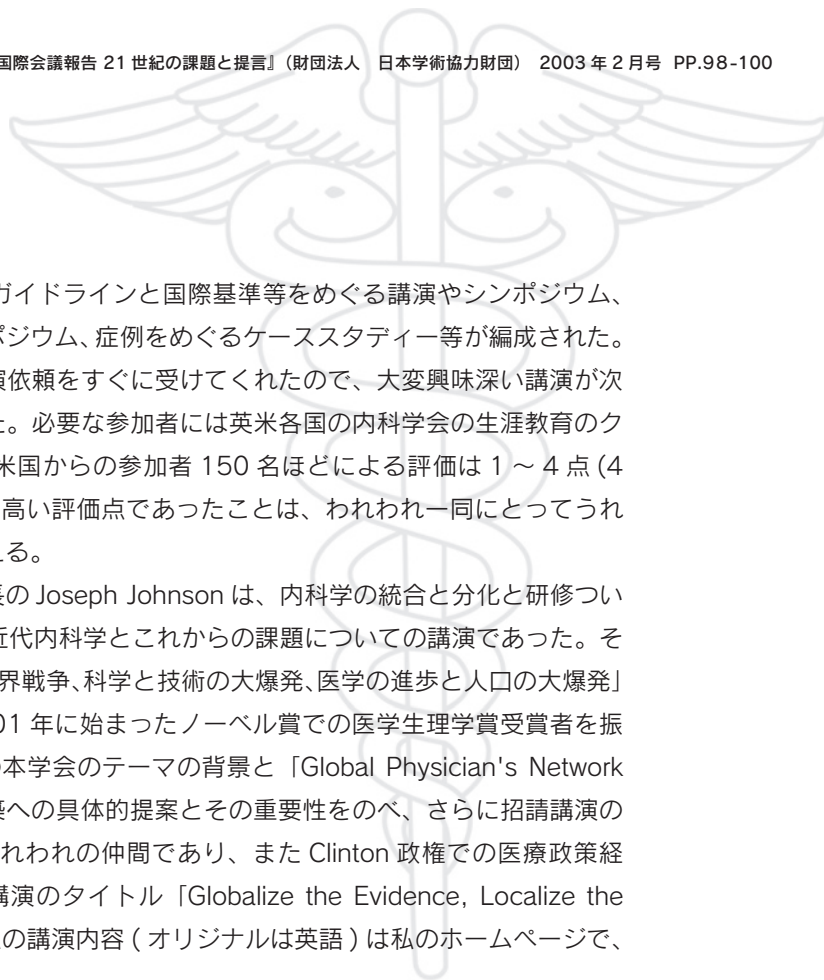
このような時に、まったく偶然とはいえ、第 26 回国際内科学会を日本で開催できたことは本当にうれしいことである。日本内科学会は、学会 100 周年記念事業としてこの 1 年間に記念展示と講演会を全国的に展開させ、日本学術会議と共催したこの国際学会を 100 周年事業のハイライトの一つとして多大な支援をして下さった。

この第 26 回国際内科学会は平成 14 年 5 月 25 日～ 30 日に京都国際会議場で開催され、開会式には天皇、皇后両陛下のご光臨をいただいた。陛下は開会のお言葉で北里柴三郎（ペスト菌発見）、志賀潔（赤痢菌発見）、またペニシリン、ストレプトマイシン、プロミン（らい病の特効薬）に触れられ、20 世紀はじめの医学の進歩に触れられるとともに、21 世紀の内科医の患者の心への配慮の大切さにも触れられ、18 年前の 1984 年に日本ではじめてこの国際学会が同じ京都で開催されたときに皇太子と皇太子妃として参加されたことに触れられ、会員とのレセプションでの再会を楽しまれた（天皇陛下のお言葉、学会プログラム、写真等は私のホームページ <www.KiyoshiKurokawa.com> から、あるいは直接 <www.icim2002.org> からアクセスできる）。

総合的、横断的課題を中心としたプログラム編成に高い評価

21 世紀、国際化時代を迎えて内科医の役割は何か、これこそが今回の主要テーマであり、大会の「Global Physician's Network : A Challenge for the New Century」は、まさにこのような背景と意識を表現したものである。

プログラム編成は、20 世紀に医学と医療技術の進歩で細分化してきた内科学の進歩を受けて、情報化と高齢化、疾病構造の変化を受けての 21 世紀には、臨床医学の基本としての内科学と生命科学の進歩と proactive な社会との関係を考慮した大きな課題、すなわち総合的、横断的な話題に中心を置いた。再生医療、分子標的療法、医療と「IT 革命」、高齢化社会、医療倫理、画像診断、医療の質と医療経済、



患者の安全と医療過誤、感染症の世界動向、ガイドラインと国際基準等をめぐる講演やシンポジウム、さらに各専門分野での話題を取り上げたシンポジウム、症例をめぐるケーススタディー等が編成された。

講演者は世界的にも業績のある人たちが講演依頼をすぐに受けてくれたので、大変興味深い講演が次から次へと展開されるすばらしい学会になった。必要な参加者には英米各国の内科学会の生涯教育のクレジットを取得できるようになっていたが、米国からの参加者 150 名ほどによる評価は 1～4 点 (4 点が最高) のスケールで「3.5」という極めて高い評価点であったことは、われわれ一同にとってうれしく、また全体構想のよさが確認できたといえる。

会長講演は二つあった。国際内科学会理事長の Joseph Johnson は、内科学の統合と分化と研修についての Sir William Osler が確立した 20 世紀の近代内科学とこれからの課題についての講演であった。そして第 26 回国際内科学会会長である私は「世界戦争、科学と技術の大爆発、医学の進歩と人口の大爆発」に特徴づけられる 20 世紀の医学進歩を、1901 年に始まったノーベル賞での医学生理学賞受賞者を振り返りながら考察し、21 世紀の課題としての本学会のテーマの背景と「Global Physician's Network : A Challenge for the New Century」の構築への具体的提案とその重要性をのべ、さらに招請講演の予定であったのに脳腫瘍で 2 月に逝去したわれわれの仲間であり、また Clinton 政権での医療政策経済局長を務めた Dr. John Eisenberg の予定講演のタイトル「Globalize the Evidence, Localize the Decision」を引用して講演を締めくくった (私の講演内容 (オリジナルは英語) は私のホームページで、また日本語でも読むことができる)。

途上国の若者の参加者に

討論の機会を設定

参加者ははじめの予定よりはやや少なく、海外から約 800 名、国内から約 3,200 名だった (どうも日本人は内向きのようで、自分たちの狭い専門分野の学会には出席が良いのだが)。特にアジアや東欧の開発途上国の若者たち 150 名程度に「Young Investigator Award」の財政的援助とポスター発表をしてもらい、さらに「ワークショップ」を開催してそれぞれの国での医学、医療、内科学の、問題点や可能な解決策を模索しながら討論の機会を設定した。約 150 名が参加したが、みんなの交流の場としての e-mail ネットワークを作りあげ、これからこれを通して活動を広げていく予定である。このような情報交換の「場」を作りあげていくことによって、この国際学会の掲げたテーマの実現への第一歩を踏み出していければ、と考えている次第である。

参加者すべてから、内容、運営等すべてに大変好評であったこの京都での国際学会であったが、日本学術会議、日本内科学会、国際内科学会、日本医師会、臨床内科医会等の多くの団体、そして一人ひとりの参加者、また企画運営にあたったすべての皆さんに心から感謝したい。日本学術会議がこのような国際学会を共催することは、国際的にも国内的にも大変に重要なことで、予算は言わずもがなだがもつと共催する機会を増やすべきと強く感じ、またそうあるべきと考える次第である。

黒川 清 (くろかわ きよし 1936 年生)

日本学術会議副会長、第 7 部会員、東海大学教授、東海大学医学総合研究所長、東京大学名誉教授
専門：診療科学、病態代謝学